

大道芸通信

編集発行/日本大道芸・大道芸の会 光田 憲雄

(daidogeikib.biglobe.ne.jp) http:// daidogei.info

盛夏の生業

これまで何度も言ったり書いたりしたから「またか」と思われる方もあるかも知れないが、旧暦と新暦のずれから来る季節のずれ感があるのはやむをえない。現在の夏は六月から八月までだが、旧暦時代は四月から六月までが夏であつた。今の人に四月や五月が夏だと言つてもピンとこないだろうが、夏関係の生業がその頃から始まるのでやむをえない。頭の方を切り替えてもらい、今は八月夏の真つ盛り。

四代広重 菊池喜一郎の 其の後は徐々に敷を増や『江戸府内 絵本風俗往来』した。当初こそ豪商や貴族、は、富士講や大山講が動き出 大名の愛玩物であつたが、すのが、五月二十八日頃前後。江戸時代も半ばを過ぎる同じ頃始まる生業が、「金魚」と、徐々に世間に浸透し、「売り」や「心太売り」、「風 蓬には庶民の手の届くようになつた。文化文政(一八〇

金魚が初めて我が国へ入つ たのは『金魚養玩草』(弘化 三年一八四六刊)に、或老人 云うには、「金魚は人皇百五 代後柏原室時代の文亀二年 (二五〇二)に泉州堺(大坂・ 堺)の港に渡つた」とある。 今はその声を聞けない

俳優見立夏商人 金魚売り 歌川国貞画(ネット検索)



ひと声半のところてんを以て粧ふ又ところてんに注げる醤油酢を入れたる徳家山口やカリン糖

振り売りの声は同じ言葉を繰り返すことが多いのは、そうすることによつて頭の中へインプットされやすいからである。ところてん屋も同たり。ところてんやアかんじこと、同じ言葉を繰り返すようだが、一度目はそのまま二度目は一度目の言葉を途中まででやめたりと、途中から始めたりして変化をつけ、マンネリ化を防いでいるようにも思える。

風鈴売り

荷箱に糸立て籠の日除け屋根を覆ひ箱の巡りに種々の風鈴をうつくしくして釣ち振り好みに従ひ神仏の演技利益を簡略に謡ふ 其の調ありがたき味あるより信心家は招きて謡はしむ おしるこウーと呼ぶは 白玉入りのしるこなり お正月やア おしろこウーと呼ぶは餅入りのしるこなり 此の商人若者にはなし皆老人のみなり 二上がり高音入りの三味か

「ところてんやの荷ひ箱は 定齊屋は抽斗の鏝をガチ格子にして箱の中をすかしヤガチャ鳴らしながら歩くて見せたるは涼しきを示せのが呼び声代わり。風鈴屋の芝居狂言切られ与三郎の相方なるべく其箱を杉の青葉も風に鳴る音が呼び声。」

まだまだ盛夏に欠かせない物は、冷や水売りや麦湯売りなどたくさんあるが、何れも以前紹介したので今回は省略するつもりであつたが、夏の夜は長いし寝苦しい。『江戸府内絵本風俗往来』の著者もそうであつたらしく、思いつくまま述べている。

「日暮るるや否 按摩アはり(鍼)の声 頻りに此処彼処二湧くが如く、又大きな提灯を点じ箱を肩より脇へつり 本

豆やア枝豆へ 豆やアえだま 是は女に限る売り物なり 尤も貧窮のたづき 小児を背負ひなどして可憐姿なり 総髪撫で下げにて四十歳前後なる男に多く襟に輪袈裟をか け手に錫杖を打ち振り広袖の浴衣に三尺帯の平くけ帯といふ出で立ちにて さんげさ んげエ六根清浄と節を付けて 唱へつづ来る。呼びて賽銭を 渡すや軒下に立ちて錫杖を打 ち振り好みに従ひ神仏の演技 利益を簡略に謡ふ 其の調あ